

吹田駅移転……
異端児 川端信治郎をめぐって

新山ひろし

吹田は「鉄道とビールの町」と言われてきた。たしかに、JR吹田駅は、アサヒビールの工場と一つになっているように見えるし、その駅は巨大な操車場跡と鉄道工場につながっている。また、駅前には「朝日町」だし、「旭通商店街」が広がっている。かつては、ビール工場の税収によって、吹田の人々は税金がタダだったこともあるという。しかし、ある事件から、吹田ではビール工場に組する「ビール派」と吹田町長の川端信治郎を中心とする「川端派」とに分



旧吹田街道がJR線をアンダークロス。この辺より西に新駅が提案された

かれ、町をあげて対決が始まったという。その発端は、大正12年の吹田駅の移転問題だった。今回は、今から、88年ほど前の吹田の騒動にスポットを当ててみることにしよう。

◆ 旧吹田駅の場所を巡る ◆

大阪・京都間に鉄道が開通したのは、明治9年。それは、とんでもない事件だったに相違ない。それまで田んぼだった所に、鉄の箱が走ったのである。そして、「吹田村字松が鼻」に吹田駅ができた。その場所に出かけてみた。資料によれば、現在の駅の位置より200メートルほど西、大阪寄りに当たるところ。そこにはJRの鉄道をアンダークロスする地下道があった。南側の道は、旧吹田街道に通じている。ここが駅前商店街だったことになる。「吹田工場百年史」の証言では、吹田駅前から「斜めの道が本町に通じていた」となっているが、まさにその通りである。今度は、地下道をくぐって北側に出ると、そこは、まさにアサヒビール工場のまん前であ



川端 信治郎氏

る。工場と駅がぴったりと接しているのである。

◆ ビールの町・吹田 ◆

さて、吹田に、ビール工場ができたのは、ドイツで泉殿宮の涌水がビールにもっとも適した水であるという検査結果が出た後の、明治22年、大阪麦酒株式会社（朝日麦酒株式会社）という大プロジェクトがまさに、吹田駅にぴったりと寄り添うような形でできたのである。近代日本に背骨を通す鉄道事業の後、嗜好の欧米化を図るビールという文化が吹田に花開いたのだった。

ビール工場は美しい煉瓦造りで、まるで王宮のようだった。工場の正門が吹田駅の正面玄関に、そのままつながっている風景は、今なら、官と民の癒着、一つの企業が鉄道の駅を独占している！と非難が出ることだろう。しかし、当時の吹田は、まさに、田園のご真ん中にポツンと駅があったのである。

◆ 駅前移転問題で 議会は真二つ ◆

さて、その「抵抗感」は、吹田駅移転の問題が出てきたときに、噴



手前が吹田駅（JR）朝日町、その奥がアサヒビール工場

出することになる。騒動の始まりは大正8年に駅の東側に東洋一という大規模な吹田操車場ができ、12年に操業が開始された時だった。その時に、ビール会社側では、駅の位置を、もう少し、大阪寄りの西之庄辺りに100mほど移したいという意向が出される。地図で計測すると、今の阪急千里線の側の辺りである。

なぜ、アサヒビール側は、そのような意向をもったのだろうか。臆測すれば、工場を西の方に拡張しよつと意図していたのかも知れない。しかし、この時、吹田旧家の出身の川端信治郎町長は、真つ向から対立する動きに出た。彼は、西ではなく、東側への移転を主張した。駅とビール工場を分離し、少しでも、市民の方に近づきたい。そして



現在のアサヒビール（明治22年創業）

その主張を吹田から東の千里・岸部・山田などの村長に訴えた。そして、村長たちは連名で、ビール会社の正門前の駅を少しでも東（京都側）へ移転させてほしいという嘆願書を提出した。

郷土史家の池田半兵衛さんは、その時、「町中がビール派と地元派とで、真二つに割れて、激しい対立抗争を展開した」と写真集「吹田」に書いている。そして、結局、大正13年、川端町長らの意向が通り、吹田駅は約200メートル東へ移転した。これが現在の吹田駅の位置である。しかし、この事件は、ビール会社のプライドを大きく傷つけるものであったらしい。以来、ビール会社の関係からほとんど吹田町会に議員を送り込むことになった。議会は、「ビール派」と「川端派」との決戦の場となったのである。そ

の後、昭和15年に吹田は町から市へと発展する。しかも、初代の吹田市長が川端信治郎だった。市議会も、「ビール派」と「川端派」の対立の場となったのである。「ある町の百年・吹田」には、「41騎が入り乱れ戦塵渦巻く吹田町ビール派勝？ 川端派？ 双方負けてはならぬこの一戦」という新聞記事を紹介している。しかし、市民たちは、その対立に徐々に飽きていったようだ。同じく「ある町の百年に」は「ビール派」が白だと言えは、「川端派」は黒という。要するに、足の引張り合い。「と」いうのが、議会で対決の実態だったようだ。これでは、市民たちは興味を失っていったらう。事実、川端市長も2年後に市長を辞すこととなった。騒動の争点そのものが時代とともに、意味がなくなつていったというのが、本当のところではないだろうか。

◆ 吹田駅の父？ ◆

さて、今回、僕はアサヒビールと吹田駅の周りを巡り、その風景を撮影しようとした。それで、一番気になったことは、鉄道の北側とビール工場が接する面が続き、そこに道がなく、ぐるりを歩くことができないという現実だった。この広大な空間を、市民を置き去

りにしたデザインがなされている。これはおかしい、と僕は思う。ビール会社とJRの駅の間が市民にとつてのデッドエンドとなっているのだ。川端信治郎が生きていたら、どう言つたらうか。川端信治郎は、「異端児」と言われたそうだが、僕には、とても痛快な人に感じられる。彼の「川端信治郎回顧録」を読みながら、その情熱にいささか感じてしまったせいもあるが、やはり、「アサヒビール様々」となっていた吹田に、旧吹田人の心意気を見せたという功績は認めべきではないかと思う。とにかく、大正13年、駅を東に移動したことによって、駅前の旭通商店街が発展することになる。そこから、吹田の町は「ビールの町」を脱却していくことになった。そして、たしかに発展して現在に及んでいる。「吹田駅の父」と呼ぶと川端氏はどう思つたらうか。

◆ 参考文献 ◆

- 吹田市史第7巻 「川端信治郎回顧録」
- 吹田市史第3巻 吹田市誕生
- 吹田工場百年史 西日本旅客鉄道株式会社 平成8年発行
- 「ふるさとの写真集・吹田」著者 池田半兵衛
- 「ビールが村にやってきた」吹田博物館
- 「ある町の百年」週刊朝日編 昭和44年 朝日新聞社刊